

基礎看護学実習

目 的

これまで学習してきた知識・技術・態度を基盤に、看護実践場面での体験を通して看護とは何かを考え、看護実践に必要な基礎的能力と態度を養う。

目 標

1. 入院患者の生活環境や療養生活の実際を知り、生活を支えるための看護活動及び看護の役割・機能を理解する。
2. 病院の組織・機能と、患者を取り巻く各職種の役割と連携を知る。
3. 看護の対象を身体・心理・社会的側面から理解する。
4. 対象の生活上のニーズを把握し、必要に応じた援助を実践できる。
5. 問題解決思考を用いて、一連の看護過程のプロセスを展開できる。
6. 実習で出会う様々な人々との関わりを通して、対象を尊重する態度を養う。

基礎看護学実習Ⅰ

(生活環境の理解と基本技術の適用)

目 的

患者を取り巻く環境と看護の役割を理解し、患者に合わせて適用させた看護の基本技術を実践できる。

目 標

<基礎看護学実習Ⅰ-1>

1. 病院の概要と各職種の連携を知る。
2. 利用者の視点から病院・病棟・病室環境を知る。
3. 患者に行われている看護援助を知り、看護師としての態度や基本姿勢を考えられる。

<基礎看護学実習Ⅰ-2>

1. 患者の療養生活と日常生活について理解し、状態を考慮した日常生活援助が実践できる。
2. 自己の行った看護行為を振り返り、日常生活援助技術の適用の妥当性を評価できる。
3. 患者－看護師間の相互作用の重要性を理解できる。
4. 看護チームの一員として自己の役割を学び、看護学生として責任をもって行動できる。

<基礎看護学実習 I - 1 >

内 容

1. 病院の概要と役割を理解する。
2. 看護部の概要を理解する
3. 院内の構造・設備とその機能、目的、働く職種の役割を把握する。
4. 病棟・病室の構造・設備とその機能、目的を把握する。
5. 生活環境としての病棟・病室の温度・湿度・空気・音・光・臭い、プライバシー、安全への配慮の重要性を把握する。
6. 病棟における看護活動の内容・目的・方法を学習する。
 - 1) 直接的看護活動
 - (1) 日常生活援助 (2) 診療に伴う援助 (3) 患者指導
 - (4) 心理的援助
 - 2) 看護チーム・多職種連携
 - (1) 看護チーム活動 (2) 看護者間・他部門との連携 (3) 記録・報告
 - 3) 患者への配慮の仕方
 - (1) 説明・同意の確認
 - (2) 患者のおかれている状況を確認した上での実践
 - 4) 看護過程の実践
7. 援助場面やコミュニケーションを通して患者の思いを捉える。
8. 指導者の看護活動を見学し、説明を受ける。
 - 1) 病室の環境を整えるための援助
 - (1) 病室の環境整備 (2) 病床の整備
 - 2) 衣・清潔の保持のための援助
 - (1) 部分清拭 (2) 入浴の介助 (3) 足・手浴 (4) 整容
 - (5) 洗髪 (6) 口腔ケア (7) 寝衣交換
 - 3) 食生活への援助
 - (1) 食事の環境づくり (2) 食事の介助
 - 4) 移動に関する援助
 - (1) 体位変換 (2) 車椅子・輸送車による移送 (3) 歩行介助

方 法

1. 実習開始前に、学内にてオリエンテーションを受ける。
2. 学内実習
ねらい：実習の目的・目標・内容・方法を理解し、実習の準備性を高める。
 - 1) 2日間のスケジュールや実習での決まり事について説明を受ける。
3. 病院実習
 - (1日目)
 - 1) 病院の概要と役割、看護部の概要についてオリエンテーションを受ける。
 - 2) 以下の部署について見学し、構造・設備とその機能、目的、働く職種の役割と職種間の連携を把握する。
 - (1) 医療関連
総合案内、事務部門、地域医療連携総合センター、医療相談室、病歴室、外来部門（各診療科、中央採血室）、勤労者医療総合センター（治療就労両立支援部、労災疾病研究部、働く女性のための外来など）、リハビリセンター、薬剤部、放射線部、臨床工学部、中央検査室、中央手術室、中央材料室、血液浄化センター、化学療法センター、栄養管理室、薬剤部、放射線部、など
 - (2) 入院生活関連
空調機械室、ボイラー室、ゴミ仕分け室、洗濯室、売店、レストラン、浴室、コインランドリーなど
 - (3) その他
電気室、発電機室、防災センター、ヘリポート、霊安室など
 - 3) 1日目の実習終了後、「病院について学んだこと」というテーマで、以下の項目ごと実習レポート用紙に学びを整理する。
 - (1) 釧路労災病院の概要と役割
 - (2) 看護部の概要
 - (3) 病院において患者を支える職種や職種間の連携
 - (4) 1日目の振り返り
 - (2日目)
 - 1) 30分程度、教員と以下の病棟、病室の構造・設備・機能について可能な限り見学し、患者の視点でプライバシー、安全への配慮について考える。
 - 病棟：トイレ（身障者用を含む）、浴室、洗面所、清拭室
 - 病室（4床室、個室）：ベッド、ベッド柵、ナースコール、各種センサー、カーテン、テレビ、床頭台、オーバーベッドテーブル
 - 2) 指導者の説明を受けながら看護活動を見学し、活動内容・目的・患者の状態を考慮した方法について考える。
 - 3) 指導者と患者のコミュニケーション場面を意図的に観察する。
 - 4) 実習終了後、行動記録を記載する。
 - 5) 実習終了後、「看護にとって大切なこと」というテーマで、実習で学んだことを実習レポート用紙に2日間の実習での学びを記載する。

基礎看護学実習Ⅰ-1 評価表

実習病棟 階 病棟 実習期間 月 日～ 月 日 番 学生氏名

	項 目	評定	評定尺度
1	病院において患者を支える職種や職種間の連携が説明できる。	A	だいたい述べられる。
		B	少しだけ述べられる。
		C	全く述べられない。
2	病棟の構造・設備とその機能が説明できる。	A	だいたい説明できる。
		B	少しだけ説明できる。
		C	全く説明できない。
3	病室の構造・設備とその機能が説明できる。	A	だいたい説明できる。
		B	少しだけ説明できる。
		C	全く説明できない。
4	患者の療養生活環境を説明できる。	A	だいたい説明できる。
		B	少しだけ説明できる。
		C	全く説明できない。
5	各場面における看護活動の目的・方法・患者への配慮がわかる。	A	だいたい説明できる。
		B	少しだけ説明できる。
		C	全く説明できない。
6	言葉遣いは丁寧で尊重した態度で接することができる。	A	よい。
		B	だいたいよい。
		C	努力を要する。
7	決まりごとを守ることができる。	A	だいたいできる。
		B	少しだけできる。
		C	全くできない。
8	実習体験から看護に対する学びを整理して述べられる。	A	だいたいできる。
		B	少しだけできる。
		C	全くできない。

実習担当教員 _____

<基礎看護学実習 I - 2 >

内 容

1. 患者の情報を、コミュニケーション、記録物、観察などから得て、援助の必要性を考える。
2. 患者の生活過程を考慮した日常生活の援助技術を実施する。
 - 1) 病室の環境
 - (1) 病室の環境整備
 - (2) 病床の整備
 - 2) 清潔・衣生活
 - (1) 全身・部分清拭
 - (2) 入浴・シャワー浴の介助
 - (3) 部分浴の介助
 - (4) 整容
 - (5) 洗髪
 - (6) 口腔ケア
 - (7) 寝衣交換
 - 3) 食生活
 - (1) 食事の環境づくり
 - (2) 食事の介助
 - 4) 排泄
 - (1) 床上・室内・トイレでの援助
 - (2) おむつ交換
 - 5) 活動・休息
 - (1) 体位変換
 - (2) 車椅子・輸送車による移送
 - (3) 歩行介助
3. 患者に行った援助、援助に対する患者の反応、自己の行動について評価する。
4. 評価したことを次回の援助に活かす。
5. 患者との関わりを振り返る。
6. 看護におけるコミュニケーションの機能と方法を理解する。
 - 1) 患者との会話
 - 2) 行動・態度・表情の観察、解釈
 - 3) 話の内容の正確な受け止めと表出
 - 4) 必要時、意味の確認、場と時間の工夫、聞く姿勢の工夫
7. 看護チーム内での報告・連絡・相談がどのように行われているのかを学ぶ。
8. 看護者・看護学生としての必要なモラルとは何かを学ぶ。

方 法

1. 実習開始前に、学内にてオリエンテーションを受ける。
2. 学内実習
ねらい：実習の目的・方法・内容を理解し事例を通して準備性を高める。
 - 1) 紙上事例を用いて援助計画を立案する。
 - 2) 援助計画を実践し、記録を行い評価する。
3. 病棟実習
 - 1) 受け持ち患者1名を受け持つ。
《対象の目安》(1) 言語的コミュニケーションが可能であること
(2) 内容の2-1)～5)のいずれかの援助を受けていること
 - 2) 病棟オリエンテーションを受ける。
 - 3) 患者の日常生活に関する情報を意図的に収集し、情報から援助の必要性を判断して援助計画を立案する。
 - 4) 行動計画や援助計画に基づいて行動し、指導者に実施した内容やその判断

等について報告する。

5) 1 場面について、プロセスレコードを記載する。

6) 「患者の状態を考慮した日常生活援助を実践して学んだこと」というテーマで、病棟でカンファレンスを開催する。

7) 実習終了後、実習体験をもとに、「看護に対する自己の考え」を実習レポート用紙に記載する。

基礎看護学実習Ⅰ-2 評価表

実習病棟 階 病棟 実習期間 月 日～ 月 日 番 学生氏名

項 目	評 定 尺 度	評 定	
1. 日常生活援助に必要な情報がわかる。	実施する日常生活援助について、現在の生活状況・入院前の生活習慣・患者の意向などの情報が述べられる。	A	7
	実施する日常生活援助について、現在の生活状況・入院前の生活習慣・患者の意向などの情報がだいたい述べられる。	B	5
	実施する日常生活援助について、現在の生活状況・入院前の生活習慣・患者の意向などの情報が少しでも述べられる。	C	3
	実施する日常生活援助に必要な情報を述べられない。	D	0
2. 病態・治療・処置が日常生活に及ぼす影響を踏まえて、援助の必要性がわかる。	病態・治療・処置が日常生活に及ぼす影響を踏まえて、援助の必要性が述べられる。	A	7
	病態・治療・処置が日常生活に及ぼす影響をだいたい踏まえて、援助の必要性が述べられる。	B	5
	病態・治療・処置が日常生活に及ぼす影響は考慮されていないが、一般的な援助の必要性は述べられる。	C	3
	援助の必要性が述べられない。	D	0
3. 患者の状態に応じた援助計画が立案できる。	患者の状態を考慮した援助計画を立案できる。	A	7
	患者の状態を考慮した援助計画をだいたい立案できる。	B	5
	患者の状態を少しでも考慮した援助計画を立案できる。	C	3
	患者の状態を考慮した援助計画を立案できない。	D	0
4. 安全・安楽に実施できる。	患者の反応を捉えながら実施できる。	A	7
	だいたい患者の反応を捉えながら実施できる。	B	5
	少しでも患者の反応を捉えながら実施できる。	C	3
	患者の反応を捉えて実施できない。	D	0
5. 実施した援助について期待される結果の達成状況を評価できる。	事実状況に基づき、実施した援助について期待される結果の達成状況がだいたい評価できる。	A	7
	だいたい事実状況に基づき、実施した援助について期待される結果の達成状況がだいたい評価できる。	B	5
	少しでも事実状況が捉えられ、実施した援助について期待される結果の達成状況が少しでも評価できる。	C	3
	事実状況が捉えられない。	D	0
6. 援助計画を評価・修正できる。	援助計画の方法・観察点の妥当性を評価・修正できる。	A	7
	援助計画の方法・観察点の妥当性をだいたい評価・修正できる。	B	5
	援助計画の方法・観察点の妥当性を少しでも評価・修正できる。	C	3
	援助計画を評価・修正できない。	D	0
7. 事実を正確に報告できる。	観察（援助前・中・後）、援助内容、結果について5W1Hで報告できる。	A	7
	観察（援助前・中・後）、援助内容、結果についてだいたい報告できる。	B	5
	観察（援助前・中・後）、援助内容、結果について少しでも報告できる。	C	3
	事実を報告できない。	D	0
8. 意図的なコミュニケーションができる。	関わりの目的や場面に応じたコミュニケーション技術を用いることができる。	A	7
	関わりの目的や場面に応じたコミュニケーション技術をだいたい用いることができる。	B	5
	関わりの目的や場面に応じたコミュニケーション技術を少しでも用いることができる。	C	3
	関わりの目的や場面に応じたコミュニケーション技術を用いることができない。	D	0
9. 自己のコミュニケーションの振り返りができる。	対象の反応を捉え、実際の関りの場면을振り返ることができる。	A	7
	対象の反応をだいたい捉え、実際の関りの場면을だいたい振り返ることができる。	B	5
	対象の反応を少しでも捉え、実際の関りの場면을少しでも振り返ることができる。	C	3
	対象の反応を捉えられなく、実際の関りの場면을振り返ることができない。	D	0
10. 実習体験の学びから自己の看護に対する見方・考え方を表現できる。	述べられる。	A	7
	だいたい述べられる。	B	5
	少しでも述べられる。	C	3
	述べられない。	D	0

合 計

70

《態度》

項目			評価のポイント	A	B	C	D		
前に踏み出す力	1	主体性	・ 提示された学習の意味を考え、積極的に取り組める	4	3	2	1		
	2	実行力 働きかけ力	・ わからないことをそのままにせず、指導者、教員、実習メンバーなどに相談し解決に向けた行動ができる。	4	3	2	1		
考え抜く力	3	課題発見力 計画力 創造力	・ 実習体験を客観的に振り返ることができる ・ 課題解決のために何をすべきか考えることができる ・ 期日を意識した学習準備ができる	5	3	2	1		
チームで働く力	4	発信力 状況把握力	・ 自分の考えを整理し、わかりやすく伝えることができる ・ 実習メンバーの状況を把握し、行動調整ができる	4	3	2	1		
	5	傾聴力 柔軟性	・ 指導者や教員、実習メンバーからの意見や助言を最後まで聞くことができる ・ 相手にとって話しやすい態度がとれる	4	3	2	1		
	6	規律性 ストレスコントロール力	・ 様々な場面で良識やマナーの必要性を理解し、ルールを守ることができる ・ 周囲に迷惑をかけたとき、誠実に対応できる ・ チームの一員と対象への責任をもち、周囲の協力も得ながら心身の体調管理ができる	4	3	2	1		
	7	倫理性	・ 対象のプライバシーを守り、個人情報の保護に努めることができる ・ 適切な言葉遣いで、状況に応じた行動ができる ・ 対象を主体とした関わりになっているか常に考え行動できる	5	3	2	1	合計	/30

< 評定尺度 >

A : 少しの指導でできた

B : 指導を受けてできた

C : 繰り返し指導を受けながらできた

D : 繰り返し指導を受けて少しできた

実習指導責任者

担当教員

総合点

基礎看護学実習Ⅱ

(看護過程)

目 的

看護過程のプロセスをたどり看護実践の基礎を学ぶ。

目 標

1. 対象と信頼関係をつくりアセスメントや実践の結果から対象を総合的に理解できる。
2. 対象の特徴を踏まえ、看護問題を解決するために計画を立案・実施し、その評価をすることができる。
3. 看護チームの一員として状況把握を行い、他者との調整・報告の必要性について学ぶ。
4. 看護についての考え方を表現できる。

内 容

目標 1・2

- 1) 対象の環境を理解するために、病棟の特性・看護の特徴を把握する。
(病棟の構造・看護方式・日課・病棟の週間予定など)
- 2) 対象との信頼関係をつくる。
- 3) ヘンダーソンの看護論を用いて看護過程を実践する。

(1) アセスメント

①情報収集

- ・ 基本的看護の構成要素
- ・ 基本的欲求に影響を及ぼす常在条件
- ・ 基本的欲求を変容させる病理的状态

②情報の分析・解釈

- ・ 基本的欲求を充足した状態から未充足の状態を判断する
- ・ 充足していない欲求と常在条件・病理的状态との関連づけ
- ・ 充足していない原因・誘因を体力・意思力・知識の面から判断する

(2) 看護問題の明確化

未充足な状態と未充足を引き起こす原因・誘因の特定

(3) 計画立案

自立に向けて基本的欲求を充足するために必要な目標と援助方法を決定する

- ・ 体力・意思力・知識がどれだけ高められるか判断し設定する
- ・ その人の生活様式を尊重して援助方法を選択する

(4) 実施

自立に向けてその人の基本的欲求を充足するための行動をとる

- ・身体的ケア（安楽を与える）
- ・心の支え（保護する、見守る）
- ・再教育（教える、導く）
- ・治療計画との調整

(5) 評価

対象がどのくらい速やかに、あるいはどの程度までに日常の行動の自由を取り戻したかを、その人の行動の変容と評価基準とを比較して問題の予防・緩和・解決の状況を判断する。

4) 報告は簡潔明瞭・正確に行う。

目標 3－1) 看護はチームワークで運営されていることを理解する。

2) プライバシーを保護する。

3) 言葉づかいは丁寧で、他者を尊重した態度で接する。

4) アセスメントした結果や実施した援助を発表し、チームからの助言や評価を受ける。

目標 4－1) ヘンダーソンの看護論に基づく看護の目的と実践を関連づけ考察する。

2) 対象に接したり、看護実践を通して自己の看護に対する見方、考え方を整理する。

方 法

1. 実習開始前に、学内にてオリエンテーションを受ける。

2. 学内実習

ねらい：初めて実践の場で看護過程を展開する前に、看護計画の実施・評価・修正のプロセスを体験する。

1) 紙上事例を用いて立案した看護計画の、実践・評価を行う。

3. 病棟実習

1) 病棟オリエンテーションを受ける。

2) 言語的コミュニケーションに支障のない1名の患者を受けもつ。

3) 立案した看護計画に基づいて看護を実践する。

4) 1場面について、プロセスレコードを記載する。

5) 「看護過程を用いた看護実践から学んだこと」というテーマでカンファレンスを開催する。

6) 実習終了後、実習体験をもとに「看護に対する自己の考え」を実習レポート用紙に記載する。

基礎看護学実習Ⅱ評価表

実習病棟 階 病棟 実習期間 月 日～ 月 日 番 学生氏名

項 目	評 定 尺 度	評 定	
1. 基本的欲求に影響を及ぼす常在条件について情報を整理できる。	対象の常在条件を捉えて情報を述べられる。	A	5
	対象の常在条件をだいたい捉えて情報を述べられる。	B	4
	対象の常在条件を少しでも捉えて情報を述べられる。	C	2
	対象の常在条件を捉えて情報を述べられない。	D	0
2. 基本的欲求を変容させる病理的状态について情報を整理できる。	対象の病理的状态を捉えて述べられる。	A	5
	対象の病理的状态をだいたい捉えて述べられる。	B	4
	対象の病理的状态を少しでも捉えて述べられる。	C	2
	対象の病理的状态を捉えて述べられない。	D	0
3. 基本的看護の構成要素に基づいて情報を整理できる。	疾病の病態生理および疾病の経過と日常生活を関連づけて、14の基本的看護の構成因子に整理して述べられる。	A	5
	疾病の病態生理および疾病の経過と日常生活を少しでも関連づけて、14の基本的看護の構成因子に整理して述べられる。	B	4
	疾病の病態生理および疾病の経過と日常生活を少しでも関連づけて、14の基本的看護の構成因子に部分的に整理して述べられる。	C	3
	疾病の病態生理および疾病の経過と日常生活を関連づけて、14の基本的看護の構成因子に整理して述べられない。	D	0
4. 14の基本的看護の構成因子の1つ1つについて、基本的欲求に影響を及ぼす常在条件および基本的欲求を変容させる病理的状态の視点から情報を分析することができる。	充足の状況を「基本的欲求に影響を及ぼす常在条件」「基本的欲求を変容させる病理的状态」と関連づけて判別できる。	A	5
	充足の状況を「基本的欲求に影響を及ぼす常在条件」「基本的欲求を変容させる病理的状态」とだいたい関連づけて判別できる。	B	4
	充足の状況を「基本的欲求に影響を及ぼす常在条件」「基本的欲求を変容させる病理的状态」と少しでも関連づけて判別できる。	C	3
	充足の状況を「基本的欲求に影響を及ぼす常在条件」「基本的欲求を変容させる病理的状态」と関連づけて判別できない。	D	0
5. 基本的欲求の未充足の原因・誘因を体力・意思力・知識の側面から判断できる。	「体力・意思力・知識」の3側面から原因・誘因を探索し、欠けているものは何かを見極めることができる。	A	5
	「体力・意思力・知識」の3側面から原因・誘因を探索し、欠けているものは何かをだいたい見極めることができる。	B	4
	「体力・意思力・知識」の3側面から原因・誘因を探索し、欠けているものは何かを少しでも見極めることができる。	C	3
	「体力・意思力・知識」の3側面から原因・誘因を探索し、欠けているものは何かを見極めることができない。	D	0
6. 望ましい姿が設定できる。	対象の生活をふまえた望ましい姿を述べられる。	A	4
	対象の生活をだいたいふまえた望ましい姿を述べられる。	B	3
	対象の生活を少しでもふまえた望ましい姿を述べられる。	C	2
	対象の生活をふまえた望ましい姿を述べられない。	D	0
7. 看護上の問題を特定し表現できる。	原因・誘因が明らかで根拠の明確な看護上の問題が述べられる。	A	5
	だいたい原因・誘因が明らかで、根拠の明確な看護上の問題が述べられる。	B	3
	少しでも原因・誘因が明らかで、根拠の明確な看護上の問題が述べられる。	C	2
	看護上の問題が述べられない。	D	0
8. 看護上の問題を解決するための期待される結果を設定できる。	達成可能な目標とその時期について述べられる。	A	4
	達成可能な目標とその時期についてだいたい述べられる。	B	3
	達成可能な目標とその時期について少しでも述べられる。	C	2
	達成可能な目標とその時期について述べられない。	D	0
9. 期待される結果を達成するための解決策が立案できる。	対象の状態を考慮した解決策を述べられる。	A	5
	対象の状態を考慮した解決策をだいたい述べられる。	B	4
	対象の状態を考慮した解決策を少しでも述べられる。	C	2
	対象の状態を考慮した解決策を述べられない。	D	0
10. 計画に基づいた援助ができる。	計画に基づいた援助ができる。	A	4
	だいたい計画に基づいた援助ができる。	B	3
	少しでも計画に基づいた援助ができる。	C	2
	計画に基づいた援助ができない。	D	0
11. 安全・安楽に援助ができる。	対象の反応を捉え安全・安楽に援助を実施できる。	A	4
	だいたい対象の反応を捉え安全・安楽に援助を実施できる。	B	3
	少しでも対象の反応を捉え安全・安楽に援助を実施できる。	C	2
	対象の反応を捉え安全・安楽に援助を実施できない。	D	0
12. 事実状況をアセスメントし報告できる。	患者の情報や実施した援助について事実状況を整理し、解釈・判断を含め報告できる。	A	4
	患者の情報や実施した援助について事実状況を整理し、解釈・判断を含めだいたい報告できる。	B	3
	患者の情報や実施した援助について事実状況を整理し、解釈・判断を含め少しでも報告できる。	C	2
	患者の情報や実施した援助について事実状況を整理した報告ができない。	D	0

項 目	評 定 尺 度	評 定	
13. 計画に基づいて実施した援助を評価できる。	援助行為の結果と期待される結果を関連付けて評価し、解決策をだいたい修正できる。	A	5
	援助行為の結果と期待される結果をだいたい関連付けて評価し、解決策をだいたい修正できる。	B	4
	援助行為の結果と期待される結果を少しでも関連付けて評価し、解決策を少しでも修正できる。	C	3
	援助行為の結果と期待される結果を関連付けて評価できない。	D	0
14. 対象との相互作用を理解できる。	対象の思いや反応を捉え、自己と対象の言動がお互いにどう影響し合っているか述べられる。	A	5
	対象の思いや反応をだいたい捉え、自己と対象の言動がお互いにどう影響し合っているか述べられる。	B	4
	対象の思いや反応を少しでも捉え、自己と対象の言動がお互いにどう影響し合っているか述べられる。	C	2
	対象の思いや反応を捉えられず、どう影響し合っているか述べられない。	D	0
15. 自分の看護に対する見方・考え方を記述できる。	述べられる。	A	5
	だいたい述べられる。	B	4
	少しでも述べられる。	C	3
	述べられない。	D	0
		合 計	70

《態度》

項目			評価のポイント	A	B	C	D
前に踏み出す力	1	主体性	・ 指示を待つのではなく自らやるべきことを見つけ、積極的に取り組める	4	3	2	1
	2	実行力 働きかけ力	・ わからないことをそのままにせず、タイムリーに指導者や教員、スタッフ、実習メンバーなどに確認し、解決に向けて取り組むことができる ・ 患者によりよい援助を実施するために、指導者や教員、実習メンバーなどに働きかけることができる ・ 積極的に技術を習得できる	4	3	2	1
考え抜く力	3	課題発見力 計画力 創造力	・ 実習を客観的に振り返り、自己の課題を述べるができる ・ 課題解決に向けた案を複数考え、それを遂行するための準備ができる ・ 実習全体および日々のスケジュールを常に把握し、優先順位を考えて行動できる ・ よりよい援助の方法を探索している	5	3	2	1
チームで働く力	4	発信力 状況把握力	・ 状況や目的に応じて自分の考えを整理し、他者にわかりやすく簡潔に伝えることができる ・ 自分のできること、できないことを判断し対象、実習メンバー、実習指導者、教員、スタッフなどの状況を踏まえた行動ができる	4	3	2	1
	5	傾聴力 柔軟性	・ 他者の意見や立場を尊重できる ・ 指導者や教員、実習メンバーからの意見や助言を最後まで聞き、相手の意見を正確に理解できる ・ 相手にとって話しやすい状況をつくり、相手の意見を引き出している	4	3	2	1
	6	規律性 ストレスコントロール力	・ 様々な場面で良識やマナーの必要性を理解し、ルールを守ることができる ・ 周囲に迷惑をかけたとき、誠実に対応できる ・ チームの一員と対象への責任をもち、周囲の協力も得ながら心身の体調管理ができる	4	3	2	1
	7	倫理性	・ 対象のプライバシーを守り、個人情報の保護に努めることができる ・ 適切な言葉遣いで、状況に応じた行動ができる ・ 対象を主体とした関わりになっているか常に考え行動できる	5	3	2	1
＜評定尺度＞ A：少しの指導でできた B：指導を受けてできた C：繰り返し指導を受けながらできた D：繰り返し指導を受けて少しできた				合計	30		

実習指導責任者

担当教員

総 合 点	
-------------	--